

日本鱗翅学会 中国支部会報

第10号 (2009年)



目次

支部長挨拶	1
第10回日本鱗翅学会中国支部例会	2
講演要旨	2
1. 岡山県北部高原の蛾について	2
三宅 誠治（岡山県）	2
2. 侵入鱗翅目 3 種の寄生ハエ	3
田村 昭夫（鳥取県）	3
3. 島根県産ヒメシロチョウ標本の発見と記録の検証	3
土畑 重人・淀江 賢一郎*・奥島 雄一（*演者）（島根県）	3
4. 山口県の鱗翅目の動向（2008）	6
後藤 和夫（山口県）	6
5. ルーに対するアゲハチョウ類の寄主適合性	9
朝倉一星・本田計一*・大村尚（*演者）（広島大・院・生物圏科学研究科）	9
第10回日本鱗翅学会中国支部総会議事録等	10
会員の近況報告など	11
お知らせとお願い	14
1. 支部助成金	14
2. 会員名簿等の取扱いと経費の節減について	14
3. 支部会報の原稿を募集しています	15
4. 寄贈図書等の紹介及び支部保管リスト	15
5. 第10回支部例会の開催について	15
6. 「日本鱗翅学会入会のおすすめ」について	15
2009年度中国支部役員連絡先	16
日本鱗翅学会中国支部規約	16
編集後記	18

<表紙写真説明>

林床に舞い降りたサツマニシキ *Erasmia pulchella nipponica* ♀ 2008 年 10 月 5 日撮影
山口県下関市住吉神社（後藤和夫）

支部長挨拶

毎年挨拶に暖冬のことに触れるのは当たり前のことになってしまいましたが、2009年度の冬も大寒が明けて直ぐに外気温は13℃まで上がり、早くもモンキチョウが飛び回っていました。また萩市では2月20日頃にルリシジミが羽化しているとの情報も寄せられました。菜種梅雨も2月の22日から始まり冬を体感することなく早い春を迎えたと思いますが、支部会員の皆様方も仕事に趣味にとお元気でご活躍のことであつたと拝察しております。

支部の事務機関を担当しまして5回目となりましたが、区切りとなる会報の発行業務も滞ることなくお届けすることができましたのも、各県支部会員のご協力と県幹事さんのお骨折りがあつたからだと思っています。これからも学会とそれに所属する支部の活動は継続されるわけですが、更に発展的に向上させるには会員の方々が、少しでも関わって参画することしか無いと思います。

ただ現実を見渡してみると昨年の秋以来の世界規模の大不況は、この様な趣味や研究の世界にも何らかの影響が出ることは避けられない情勢となっているようです。多くの方は仕事をしながら、その傍らこれを趣味として継続してきました。当然生活の基盤となるものが確率されて、ある程度の事ができるお金（小遣い）が確保されていました。しかしここ10年間の経済を見る限り、昭和40年当時の現役世代では考えられないような諸々の複雑な問題が起こってきております。

これから21世紀の昆虫学の歩むべき姿は少なくとも30年以前の時とはかなり変化し、ただ採集して標本にするようなことだけでは到底長続きすることなく、一部の裕福な方のごく限られた遊行的なものとして生き残る懸念も出てきます。このことは研究者として大学などの機関で学位など修得しても、狭い市場の中では生活の基盤となる就職が定まらず、安定した収入が得られてないという現状が多々見受けられます。

これは会社を始めとして、各種関係の機関に勤務されておられる同好の志についても、不況の波から来るリストラや解雇の嵐の中で、果たして何人の方がこの様な研究や趣味に打ち込めるのかは流動的であるような気がします。また経済不安は昆虫の業界のなかでも競争の激しい殺伐としたものになる様な感じがします。この様に見ると悲観的な材料ばかり出てくるのですが、思考を転換させて生きていくことが大変重要であると思われ、これについて一般論として述べてみたいと思います。

元来自然の中で生きている昆虫類は商業的価値観で捉えるのではなく、アマチュアであれば最後まで無理のない趣味の領域として楽しむことが大切ではないかと思います。また研究のために仕事として従事される方は、如何にしたら数多くの昆虫類を人類の中で生かすことができるかが、現在の課題であるような気がします。その理由として前出のことは商業的要素が強くなるとどうしても競争が生まれ、自然のものをお金に換算してしまうため、不自然な形となって世の中の変化に追従できず持続可能な仕事として成り立たなくなってくることが、事例として出てきています。

後者は複雑となった現在社会の中で、価値観も異なりそれに似合った評価が得られにくくなっている様な気がします。過去昆虫類が経済の発展に一役買った事例の代表的なものが、ミツバチから蜂蜜が得られ世の食料の収益に大きく役立ってきたこと。カイコを養殖し絹糸を作りだし衣服産業に大きく寄与してきたことなどは、誰でもが知っている事例としてありました。これを現代複雑となった病気の治療薬として、医学の面で決定的な開発ができないかなどを思いつくことができます。

以上の様なことを勝手な思いつきとして述べてきたことについてはお許しいただくとして、学識のある有能な方々にとっては当然のこととして取り組まれておられる事柄ですが、一つ一つまたは一步一步現実ものとして形が見えれば、昆虫学も更に躍進し発展することが期待できると思います。

2009年度は学会の役員の改選年にあたります。秋には新役員選出の投票が行われますが、発展と向上をするために熱意を持たれた会員さんが出現されることを期待すると共に、任期の終わるこの一年を少しでも実のあるものにし、それには皆様方が、かつての昆虫少年を思い出して面白く野、山を探索できればこれまた楽しいものだと考えております。そして成果を自身の軌跡として支部会報などに近況報告として、寄稿いただければこれに越したことはないと思っております。

終わりに、会員皆様の本年度のご健康と、多大な成果のあがりますことを祈念いたします。

中国支部 後藤和夫

第 10 回日本鱗翅学会中国支部例会

第 10 回支部例会が鳥取県鳥取市で次のとおり開催され、後藤支部長以下支部会員及び一般から計 17 名が参加した。

日時：2008 年 11 月 29 日(土) 13:00～17:00

場所：鳥取県鳥取市 鳥取県立鳥取博物館

・講演会参加者：計 17 名（敬称略・アイウエオ順）

支部会員	伊藤國彦，田村昭夫，布目和子， 星川和夫，本田計一，松田裕一， 三宅誠治，矢野重明，吉田嘉男， 淀江賢一郎，若槻匡志，渡辺一雄
非 会 員	中秀司，梅羽信哉
事 務 局	後藤和夫，伊藤靖子，川元裕



例会開催風景

《講演要旨》

1. 岡山県北部高原の蛾について

三宅 誠治（岡山県）

岡山県の北部には中国山地に連なる形で蒜山・恩原の二つの有名な高原が広がっている。それぞれ古くから昆虫が豊富なことが知られており、好採集地として多くの昆虫愛好家を引きつけてきた。蛾類についても興味深い場所であるが、これまで断片的に調査されてはきたが両地域共にまとまった報告は見られなかった。ところが 2008 年に、相次いでその調査報告書が発行された。そこで、演者は両報告書を比較することでそこから見えてくるものを推測を含めてまとめた。

調査環境

調査が行われた標高は恩原が約 770m，蒜山は 520m～860m である。気象的にはどちらも冷温帯に属し似通っている。植生においても、両地域共にブナ・ミズナラの森林，カシワを交える草原，湿地と、ほぼ共通の要素を含んでいる。但し，調査対象としている範囲が蒜山の方が広く，例えて言うなら恩原ではそれぞれの要素を調査地点の一箇所から一望するのに対して蒜山は個々の面積が広くその環境ごとに調査してそれを集計することにより蛾相を把握している。

生息種類数

蒜山で 1213 種，恩原で 1093 種（種の統合により 1092 種となる）がリストアップされているが，岡山県で確認されたのが 2380 種（演者集計）から考えると，どちらも岡山県に生息する種の約半数が確認されたことになる。つぎに，もっと巨視的に見て，蒜山・恩原両地域を岡山県北部の高原として一つのものと考えた場合，そこで確認された種類は 1496 種となる。更に，岡山県野生生物目録（岡山県：2003）で北部に生息するとされながらこれまで当地域で確認できていない 384 種を，今後確認されるであろうと推測して加算すると，1880 種となる。即ち，この 1880 種が蒜山・恩原の高原に生息するであろう蛾の種類数と言うことが出来る。当然，今後調査が進めば新たな追加種が増えることが予想され，それをも含めると 2000 種というのが岡山県北部の高原に生息する種類数として一つの目安となると推定される。

2. 侵入鱗翅目3種の寄生ハエ

田村 昭夫（鳥取県）

鳥取県では、クロメンガタスズメ（2004年）、イチジクヒトリモドキ（2007年）などの南方系侵入昆虫を目にするようになった。これら2種について幼虫を飼育したり、採集したりする中で寄生ハエの存在が明らかになったので報告をする。また笠岡市でクロマダラソテツシジミを採集していたときにもそばに寄生ハエがいた。これもあわせて報告する。

- ・ クロメンガタスズメ
今年（2008年）に児童と飼育していた蛹から寄生ハエ8頭が出てきた。5年間飼育していた中で初めての出来事であった。
- ・ イチジクヒトリモドキ
倉吉市内の畑の隅にあるイチジクの木より幼虫を発見した。幼虫を探していたところ、ハエがイチジクの木に入るのを発見。ネットを持っていなかったために採集は出来なかった。飼育していた幼虫より、ハエの蛹が出てきた。
- ・ クロマダラソテツシジミ
カブトガニ博物館（笠岡市）で採集（10-X-2008）していたときに、ソテツの葉上にいるハエを発見。交尾しているハエもいた。このハエは、クロマダラソテツシジミが繁殖していたソテツのみで見られた。
- ・ ヤクシマルリシジミ【追加】
大分県由布市の三宅武氏から11月に送っていただいたヤクシマルリシジミの蛹から1頭のハエの蛹が出てきた。湯布市にヤクシマルリシジミが進出したのは2008年（第55回鱗翅学会福岡大会）であるとのこと。

まとめ

クロメンガタスズメは5年、イチジクヒトリモドキは2年の進出歴である。クロマダラソテツシジミとヤクシマルリシジミは1年未満の進出歴である。短時間のうちに侵入昆虫は、寄生ハエのライフサイクルに組み入れられている。これらのハエは広範囲の鱗翅目に寄生するハエであろう。侵入して爆発的に広がることを防ぐ役割を果たしているのであろう。クロメンガタスズメやイチジクヒトリモドキは越冬できずに毎年進出してくる。そのために特定のハエではなく、既に鳥取にいる寄生ハエがこれらの種に寄生するのであろう。

3. 島根県産ヒメシロチョウ標本の発見と記録の検証

土畑 重人・淀江 賢一郎*・奥島 雄一（* 演者）（島根県）

土畑が倉敷市自然史博物館収蔵の標本の中から島根県産ラベルの付いたヒメシロチョウを発見したことから、演者らはその真偽を検証するためのプロジェクトを立ち上げた。

検証の結果、①このたび見つかった標本は、平田信夫氏採集の島根県（現在の仁多郡奥出雲町上阿井）産で、島根県初の採集記録かつ唯一の標本であること、②従来島根県初記録とされてきた荒木（1956）の記録は、実は広島県産であつたらしいこと、③現在は生息環境が失われているが、当時存在した広島県側から広がる島根県側放牧地に生息していた可能性があること、が判明した。

「生物（生息地）の保全」と同等の重要性を持って「生物の記録という知識の保全（標本、文献など）」にも相応の労力がかけられるべきである。

詳細は「すかしば」No.56(2008)に掲載。

“島根県産”ヒメシロチョウ標本

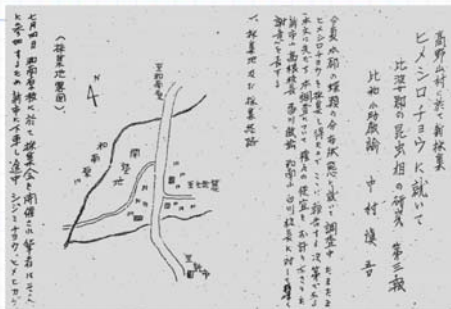


1♂(夏型), 島根県仁多郡阿井村呑谷(のんだに) 12. Jul. 1952, 平田信夫採集, 倉敷市立自然史博物館所蔵(平田コレクション, KURA JF-39267).

当初, 解決を目指したこと

- (1)この標本は, 本当に島根県で採集されたものなのか?
島根～広島県境の呑谷峠で, 島根側に入って採集したものである。
- (2)この標本の採集記録は, すでに何らかの形で文献化されているか?
平田先生ご本人は書いていないが, 水戸野武氏が1行書いたもの, それをもとに白水先生が図鑑に書いたもの, 広島虫報に中村慎吾氏が藤村俊彦氏からの聞き取りとして書いたもの計3編がある。
- (3)当時の島根県にヒメシロチョウの生息環境はあったのか?
毛無山西麓には広大な放牧地が呑谷峠にいたるまで広がっていた。小林一彦氏, 益野俊氏らの報文がある。

初記録の報文(中村慎吾,1950)



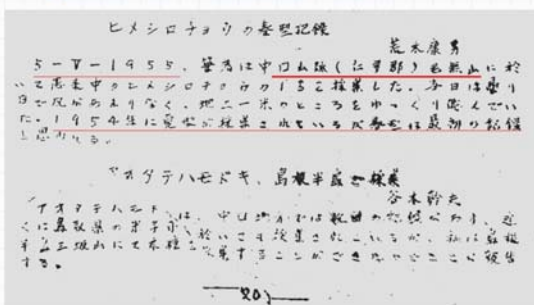
中村慎吾(1950b)高野山村に於て新採集のヒメシロチョウに就いて, 比叢科学, (19): 12-13.



平田信夫氏の採集行程。1952年7月12日。

内務省地理調査所発行の5万分の1地形図「嶺原」に平田信夫氏が赤鉛筆で当日の行程を記入, 倉敷市立自然史博物館所蔵。

島根県からの“初記録は荒木(1956)”



荒木康男(1956)ヒメシロチョウの春型記録, 千鳥, (1): 20.

白水隆「日本産蝶類分布表」(1958)

- 若槻区志(1956), 松江付近のギフチョウとその生活史(千鳥, (1): 5~11) [松江付近の産地の記を含む]
- 谷本幹夫(1956), 松江城山の蝶(1)(千鳥, (1): 12~13) [アゲハチョウ科10種]
- 谷本幹夫(1956), 松江城山でナガサキアゲハ採る(千鳥, (1): 20) [1♀, 1954年9月4日; 1頭, 1955年5月18日]
- 荒木康男(1956), ヒメシロチョウの春型記録(千鳥, (1): 20) [仁多郡毛無山, 1♂, 1955年5月5日]
- 谷本幹夫(1956), アオタテハモドキ島根半島で採集(千鳥, (1): 20~21) [三坂山, 1♀, 1955年5月18日]

白水隆編(1958)『日本産蝶類分布表』, 283pp. 北隆館。(1957年までの分布に関する文献を抄録付録で掲載)。

モひとつの文献

八岐の大蛇が出たという伝説のある仁多郡も余り踏査されていないが, 仁多町阿井ではヒメシロチョウがかつて採集されたことがあり, 今年の6月5日には八川村でウスバシロチョウととれた(森山正治氏採集)。この蝶は鹿足郡津和野町の青野山麓でもとれてはいるが山陰では極めて珍らしい。大原郡加茂町は出雲市に近い町であるが, チョウセンシロチョウの産地として有名で, ここを流れている赤川はゲンジボタルの名所として夏の夜は人を集めている。加茂町に隣接する大東町佐世では天牛の珍種ジャクシンカミキリが1952年4月28日にとれて驚

水戸野武夫(1956)昆虫のお国じまん(9)山陰の巻, 新昆虫, 9(9): 27-29.

白水隆「原色昆虫大図鑑 I 蝶・蛾」(1959)

2. ヒメシロチョウ *Leptidea amurensis* Ménétries
前種に類似し, その季節的変異, 8月による翅形・斑紋の相違は本質的には前種にひとしいが, 翅形が狭長で特に前翅端がとがることによって前種と区別される。本種においても8月よりも前翅端がとがる傾向があり, その形は前種のものに近い。前翅端の黒斑の出現程度は前種と同一性。同一季節型ごとに比較した場合にいずれも本種の方が強く, 特に夏型には8月とともに強く発達する。
北海道, 本州, 九州に分布。北海道では島内でも暖温な地域に多く, 前種と混生する場合もある。本州では東北より中部地方に亘って分布は広いが, その産地は一般に局所的な傾向がある。しかしその産地においては群棲することが稀ではない。近畿地方よりは未知。中国地方では中国山脈毛無山の山麓(広島県高野町新市付近)と北山麓(島根県仁多郡阿井村)に産地が知られる。四国よりは未知。九州では中部の阿蘇, 九重の高原地帯に限って分布する。国外では朝鮮, 満州, アムール, トランスバイカル, バイカル, アルタイ, イルターーツ, 北支, 西支などより知られる。日本西南部の山地及び東北の低地帯では年3回の発生。春型(第1化)は4月下旬~5月, 第2化の夏型は7月, 第3化の夏型は8月中旬~9月に出現し, 草原上を高く飛び見れば採集は容易。幼虫の食草は通常タマフジであるが, 長野県上伊那地方では幼虫はツルフジバカマを食べ, 野外でタマフジを食べることがないという。また同じマメ科のレンリソウを食べる記録がある。越冬態は蛹。(2a, 春型8; 2

白水隆ほか(1959)『原色昆虫大図鑑 I 蝶・蛾』, 14pp.+284pp.+67pp.+40pp.+48pls. 北隆館。

16. ヒメシロチョウ *Leptidea amurensis* MENÉTRIÉS, 広島県比婆郡高野町の中国地方における唯一の生息地^{別所}で、高野町では新市、市上、市原、下、高野町に付近、上里原、岡大内、下門田、別所^{別所}など10ヶ所ほどの地点で生息が確認されている。いずれも、フルフジバカマの茂る草原、または堤防などで、フルフジバカマ(マメ科)を食し、年3回、4月下旬、6月下旬〜7月中旬、8月下旬〜9月上旬発生し、なぎで越冬する。

最近、従来の牧野が構造改善事業で開発され、乳牛用の採草地となりつつあり、また、農業の影響もあって、減少の一途をたどっている。

知られざる中國地方の好採集地！

たのか？

68種が記録されている。毛無山の南側では中いるが、北側では全く発見出来ない。標のつづ

藤村俊彦(1960)知られざる中国地方の好採集地 I. *Insects Magazine*, (48): 23-26.

2. ヒメシロチョウ *Leptidea amurensis* Menetries
 (Fig. 11. 2a. 春型; 2b. 同♀; 2c. 同♂; 2d. 夏型; 2e. 同♀; 2f. 同♂)
 幼虫の越冬型(前翅)は、その季節の変異。♀による翅形・斑紋の相違は本質的には前翅にひとしいが、
 雄の翅形は特に前翅端がとがることによって前翅と区別される。本種においても♀はやより前

荒木(1956)・・・中国山脈(仁多郡)毛無山(島根県内でなかった)
 平田コレクション(1952)・仁多郡 阿井村 香谷(正確には香谷峠)
 水戸野(1956)・・・仁多町 阿井(聞き取り＝平田信夫)(荒木1956を知らずに!)
 白水(1958)・・・仁多郡 毛無山(荒木1956を引用)
 白水(1959)・・・仁多郡 阿井村(聞き取り＝水戸野＝平田)
 近木(1962)・・・仁多郡 仁多町 阿井 毛無山(白水分布表1958の引用)
 白水(1965)・・・仁多郡 阿井村(白水1959のまま)
 保田ら(1967)・・・島根県 阿井村 香谷(聞き取り＝藤村＝水戸野＝平田)
 近木(1971)・・・仁多郡 阿井(近木1962のまま)
 藤岡(1975)・・・仁多郡 仁多町 香谷(保田ら1967 & 近木1971の混同)
 白水(1975)・・・仁多郡 仁多町 阿井(白水1959に、保田ら1967を加筆)
 淀江ほか(2006)・・・仁多町 香谷 毛無山(荒木1956、保田ら1967、近木1971、白水1975の混同)

- (1) 従来、鳥根県初記録と言われていた荒木康男(1956)の記録(1956年5月3日)は、実は広島県側であったらしいこと、標本は失われた。
- (2) 平田信夫氏が1952年7月12日、吾谷峠で採集した標本が倉敷市立自然史博物館の所蔵標本から見出され、これが鳥根県初の採集記録かつ唯一の標本であること。
- (3) この平田氏の採集記録は、水戸野(1956)に簡単に紹介されたあと、白水先生の『原色昆虫大図鑑1 蝶螺篇』(1959)に記載された。(水戸野武夫氏を経由して、平田信氏から直接、白水先生が情報を入手されたものであると推測できている)。
- (4) 保田ら(1967)「広島県の蝶螺」は、平田氏の記録は広島県側からの迷入によるものとした。(藤村俊彦氏からの聞き取り)。
- (5) 近木英鼓(1971)「山陰の蝶螺」は、荒木(1956)のみ紹介。鳥根の蝶螺は全無、平田氏の記録を忘却していた。白水先生が平田氏の記録を紹介しているのに！
- (6) 白水先生の「学研中高生図鑑」で、「その後の調査ではこの地方に生息しない」とされた。以降の図鑑はすべてこの記録である。

「生物(生息地)の保全」と同等の重要性をもって「生物の記録という知識の保全(標本、文献など)」にも相応の労力がかけらるべきではないだろうか。

本報は「**知識の保全活動**」の一つのささやかな試みである。

可部屋集成館(理事長:
桜井三郎右衛門)の展示
写真より。

仁多町阿井にある。

4. 山口県の鱗翅目の動向 (2008)

後藤 和夫 (山口県)

<蝶 類>

・ホシミスジ *Neptis pryori* の分布について

2007 年度までの調査から、新に県境の岩国市美和町の岸根、釜ヶ原、釜ヶ原温泉から生息地が判明した。対岸になる広島県廿日市の地御前、峠、廿日市市佐伯町の峠、越峠、廿日市市大野町の妹背の滝、八坂、渡ノ瀬、大竹市の松ヶ原町、小栗林、蛇口と伊藤寿氏により発見されており、美和町で発見された個体群とほぼ同じと結論づけられる。ここから錦町の錦川（木谷原や須万地など）の生息地まで十数kmの距離があり、その間には食草（ユキヤナギ）は川沿いに多く自生するが、2008 年度の調べからは種の発見に至らない。

標本個体を見聞した限り上述の採集分は大きな変異は見られないため、錦川を含めこれらはほぼ同一の個体群であると推察する。ただ屋代島産については上記の個体とは大きさや色彩、斑紋の形態に差異があり、これは瀬戸内海の島々に分布する個体群の流れをくむものかと推論している。ただ伊藤氏も述べているように明確な境界はまだ定かではない。図-1 に県内と広島県境の分布を示す。

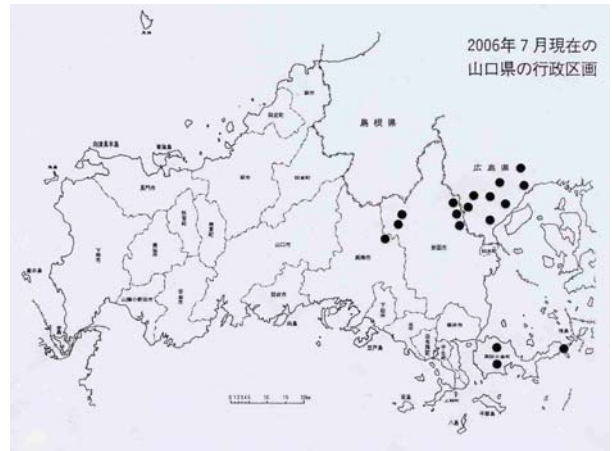


図-1 ホシミスジ分布図

・ウラゴマダラシジミ *Artopoetes pryori* の分布について

2008 年度の調査で新に山口市と美祢市、萩市の境界に位置する西鳳凰山（旧旭村）で発見があった。これは山口市や旧小郡町の山間部にかけても生息している可能性が出てきたことで注目される。また秋吉台の周辺部から美祢市美東町植山と秋芳町青景から 2 箇所の発見があった（図-2）。

更に調べが進めば、北西側になる旧川上村や旧三隅町、美祢市、長門市から発見される可能性があるため、継続調査をする種としたい。

なお、上関町周辺ほか、瀬戸内側からは 2007 年以後進展が見られない。

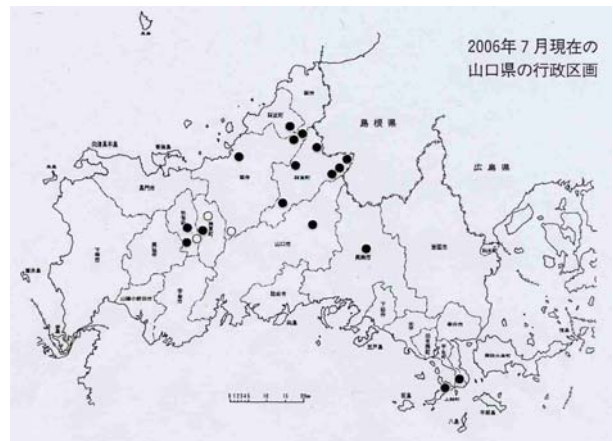


図-2 ウラゴマダラシジミ分布図

○新産地 ●既産地

・シルビアシジミ *Zizina emelina* の分布について

2008 年度の調査から山陽小野田市の旧山陽町の松茸山麓の西川から（山陽町の 2 例目）と美祢市美東町の植竹から発見があった。また徳地から引谷で新たな生息地が見つかった（図-3）。当地にはまだ隠れた生息域が存在すると予見できる。

分布図から県内の中・西部地区に多くの生息地を知ることができる。なお地元宇部市の現在の記録を整理したが、日本国内でも希に見る生息地であることが、ここ 10 年間の継続調査から判ってきた。また県内全域についても機会を見てまとめたと考えている。

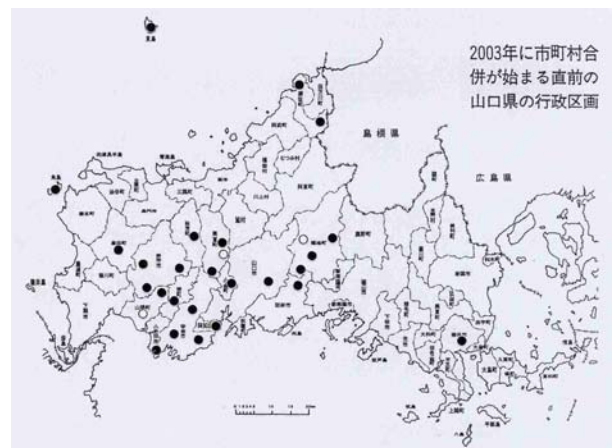


図-3 シルビアシジミ分布図

○新産地 ●既産地

・ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata* の分布について

2008 年度の調査で岩国市から 25 年ぶりの発見があった。山陰側では長門市の青海島に広く生息していることが判明した。北部からは萩市の市内で新たな生息地が各所で発見され、更に阿武町から初記録となる生息地が確認された。また秋芳町の八重からも見つかり、宇部市の旧楠町も継続調査から追加する記録があった（図-4）。

なお宇部市の現在の記録を整理したが各所に分布域があり、これも日本国内でも希に見る生息地になると予見できる。また県内全域については機会を見てまとめたいと考えている。

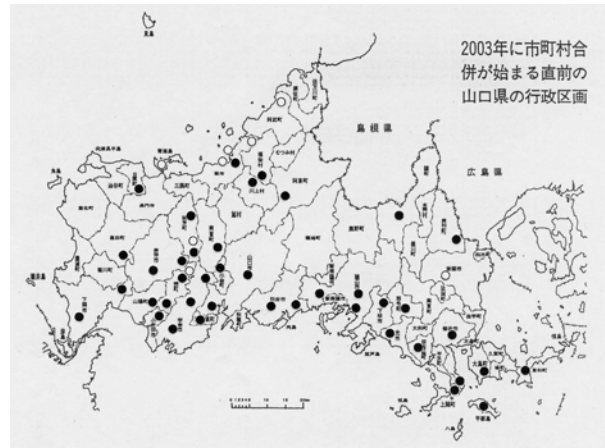


図-4 ウラナミジャノメ分布図

○新産地 ●既産地

・ヘリグロチャバネセセリ *Thymelicus sylvaticus* の分布について

本種が過去県内から記録されている場所は、内陸部の阿東町、旧鹿野町、旧錦町、旧美和町の僅か 4 町にすぎない。何れも山間の奥地にあたりその標高も 400m から 850m の地点であった。

2008 年度の定点調査から長門市の青海島の 2 箇所から本種を発見した。採集地の海拔は 5m の地点と 260m からである。これまで県内のヘリグロチャバネセセリの生息域は、山間部の寒冷な標高のあるところという認識があった。しかし島根県では山陰側の海岸部に近いところに生息し、中井衛氏の見解では本種は平地性の種であり、近縁種のスジグロチャバネセセリ *Thymelicus leoninus* の方がより標高のある山地性の種であることを示された。参考までに両種の分布図を図-5, 6 に示しておく。

このことは県内では逆のデータが蓄積されていたため、今回の発見はそれを覆すことになり、大きな発見であったと考えている。未調査地点の多い山陰側の調査を継続することが今後の課題となる。

なお両種とも環境改変工事と草原の荒廃などにより絶滅が危惧されており、その傾向はヘリグロチャバネセセの方が一段と強い。

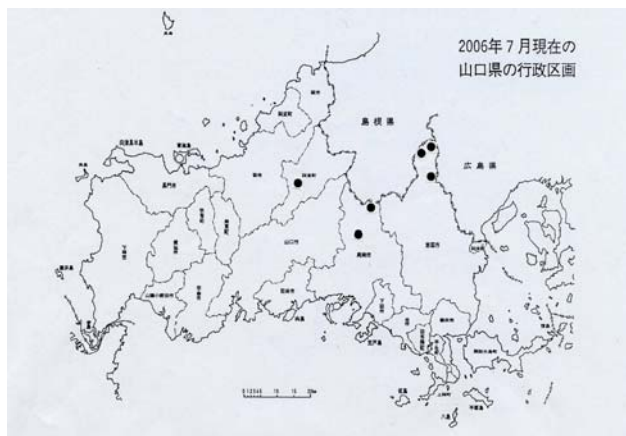


図-5 ヘリグロチャバネセセリ分布図

○新産地 ●既産地



図-6 近縁種スジグロチャバネセセリ分布図

<蛾 類>

・フチグロトゲエダシヤク *Nyssiodes lefuarius* の分布について

2007 年度に宇部市と山陽小野田市の 2 箇所から記録したが、継続調査から宇部市の旧楠町と山陽小野田市の旧小野田市から新たな発見があった。何でも無い荒地や休耕地に自生するススキが発生地になるようで、♀の生態から考えて多くの移動は考えにくいと、環境が維持されれば継続して発生するはずである。なお、この調査から♀を発見した中西淳氏が撮影した貴重な写真を紹介しておく。

今まで記録が少なかったのは、発生が 2 月から 3 月と早く、思うような調べもされていないことが一番の要因と思われる。これから調査が進めば、多くの確認と未確認県からも生息地が判明すると考えている。なお図-7, 8 は本種の♀と♂である。



図-7 フチグロトゲエダシャク♀ 中西 淳氏提供



図-8 フチグロトゲエダシャク♂

・サツマニシキ *Erasmia pulchella nipponica* の分布について

マダラカ科の最美の昼蛾で 2008 年度の調べから下関市（図-9）と岩国市の2箇所 で夏、秋とも安定して種の確認ができた。食樹となるヤマモガシは非常に局地的に自生しているようで、依存性の高い本種は食樹が発見できれば必ず生息している可能性があることを、来県し下関市の生息地を調査された国立科学博物館の大和田守氏が見解を述べられた。

以上の報告にあたり渡辺一雄氏、大和田守氏、中井衛氏、稲田博夫氏、中西淳氏、伊藤寿氏、棕木博昭氏、川元裕氏の各位に大変お世話になった。記してお礼申し上げる



図-9 下関産サツマニシキ♂

<その他の蝶類数例>

・サカハチチョウ *Araschnia burejana* について

これまで県内の西限は宇部市にも記録があり、希なもので断定するには至っていなかったが、2008年度の調査から山口市と美祢市、萩市の境界に位置する西鳳翔山（美祢市側）で確認した。過去美祢市（旧美東町内）で採集したことがあり、このことから県内の西限域は山口市の西から美祢市、長門市（花尾山）を結ぶ線上が考えられる。

引き続きこれを確実なものとするための継続調査を行いたい。

・アサマイチモンジ *Ladoga glorifica* について

この種は山口県が本州の西限となっているのは述べるまでもないが、県内の西限域について確実なデータが乏しく、結論付けるに至っていなかったが、上記と同じような経緯で西鳳翔山（旧旭村）から記録した。過去に秋吉台周辺部からの記録を加味し、本種の県内の西限域は山口市北西の西鳳翔山を中心として南は防府市、北は萩市を結ぶ線上が見えてきた。この線上から北東側には屋代島を含めて広く分布しているようである。またこの方面では近縁種のイチモンジチョウ *Ladoga camilla* より個体数は多い傾向にあるが、線上（西側）に近づくほど本種は希となる。

尚、後種については県の中央部は元より西は下関市。北は山陰側の長門市の青海島から旧須佐町。そして南側となる瀬戸内側に全て分布し、東の岩国市から旧錦町の山間部まで県内全域に分布する蝶になる。県内の両種の分布図と境界線についても近く整理できればと考えている。

・ジャノメチョウ *Minois dryas* について

2007年の定点調査から本種の生息域が山頂の開けた草付きに分布することを触れたが、2008年度の調べでも西鳳翔山の山頂に生息することが判明した。山麓から中腹部に似たような環境が存在する

が、未確認に終わった。

過去の記録も含め、平地に食草があるにも関わらず県内では山頂部に生息域が偏るのは何故なのか。単に気象などの条件だけでは無いようで、本種の持つ特異性は大変興味をそそられる。引き続き調査を行う一種としたいが、県内の平地に生息地がないことではないのでお断りしておく。

5. ルーに対するアゲハチョウ類の寄主適合性

朝倉 一星・本田 計一*・大村 尚（*演者）（広島大・院・生物圏科学研究科）

ルー（*Ruta graveolens*）は全草に特有の香気を有する南ヨーロッパ原産のミカン科の多年生草本で、ミカン属と比較して、より起源の古い植物種と考えられている。近年わが国においても薬用および観賞用として栽培されるようになり、自然状態でまれにナミアゲハによる食害が知られるようになったが、このような起源の古い植物種に対して国内のアゲハチョウ類がどのような適合性を示すのかは分かっておらず、アゲハチョウ類の食性進化を解明する上でも興味深い材料と考えられる。そこで、本研究はルーに対する在来のアゲハチョウ類の適合性を調べ、その産卵行動を制御している化学成分を明らかにすることを目的として行った。

まず8種類のアゲハチョウを用いて幼虫の成育適性試験およびルー生葉への産卵反応試験を行った。幼虫の成育適性は1齢から2齢、および5齢から蛹までの到達率を調べることでより総合的に評価した。生葉に対する産卵反応試験は、白熱電灯照明下プラスチックケース内で自由飛翔している雌成虫に生葉を提示して行った。試験の結果、ナミアゲハ、オナガアゲハおよびカラスアゲハの3種が幼虫の成育適性試験および産卵反応試験において共に高い適合性を示し、自然状態においても寄主となり得る可能性が強く示唆された。

生葉への産卵反応試験の結果から、ルーの生葉には一部のアゲハチョウに対して産卵行動を促す活性成分が含まれていると考えられたため、ルーのメタノール抽出エキスを調製し、更にそれをクロロホルム、イソブタノール、水可溶の3画分に分画し、それぞれの分画物に対する雌成虫の産卵応答性を調べた。試験には代用葉として緑色のプラスチック人工葉を用い、それを所定濃度に調製した各試料溶液に短時間浸漬し、室温で一旦風乾させた後に水を軽くスプレーして、生葉に対する産卵反応試験と同様の条件で雌成虫に提示して行った。

試験の結果、生葉への産卵反応試験において、顕著な産卵応答性を示さなかったクロアゲハおよびナガサキアゲハはこれらのメタノール抽出エキス及び分画物に対しても顕著な産卵応答性は示さなかった。一方で、生葉に対して高い産卵応答性を示したナミアゲハおよびカラスアゲハに関しては、ルーの抽出エキス、および水溶性画分に対していずれも同程度の産卵応答性を示したことから、産卵刺激活性成分は水溶性画分に局在していると推察された。そこでナミアゲハに関して更に水溶性画分の探索を行ったところ、イオン交換カラムクロマトグラフィーによって分画した酸性・中性画分に本種の主要な産卵刺激物質が含まれていると推察された。

ミヤマカラスアゲハは生葉に対する産卵応答性は著しく低かったものの、抽出エキスおよび分画物に対する応答性は比較的高く、生葉揮発性成分が関与している可能性が考えられたため、ルー生葉をイソペンタンで抽出したサンプルをGC-MSを用いて分析した結果、本植物に特徴的な生葉揮発性成分として2-Nonanoneおよび2-Undecanoneが同定された。こうした特徴的な生葉揮発性成分が本種の生葉への産卵行動に忌避的に作用している可能性が推察された。

《第10回日本鱗翅学会中国支部総会議事録等》

議題及び結果は次のとおり。(議長：後藤支部長)

1. 2008年度会計報告

事務局報告（中間報告）のとおりに承認された。

なお、次表は総会後の収支を含めた会計年度末時点での会計報告である。

2008年度支部会計報告

2008.12.31現在

○収入の部

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	131,710	
2008年度支部交付金	15,200	
2008年度支部活動助成金	31,650	
預金利子	262	
計	178,822	

○支出の部

項 目	金 額	備 考
支部例会会場費	2,200	鳥取県立博物館
支部会報第9号印刷費	22,890	1部229円×100部
支部会報第9号ほか送料	12,360	案内状含む *一部メール使用
事務消耗備品費	9,267	印刷用紙, インク, 封筒など
雑費	2,351	例会時の写真代
計	49,068	

○2009年度繰越金

178,882円－49068円＝ 129,754 円

2. 2009年度支部役員の選出について

2008年度の体制を継続することが承認された。

3. 鱗翅学会（本部）関係の報告について

①助成金は申請どおり承認された。

②大会引き受け予定支部が発表された。

（中国支部は2015年）

③文書の電子化を検討中。

4. 自然保護関係の報告について

蛾・蝶のレッドリストづくり, 保全活動及びシンポ

ジウム（大阪）を計画している。また、選定にあたり支部の各県代表者の人選がなされた。



懇親会参加者

5. 第 11 回支部例会の開催について

平成 21 年 11 月 21 日（土）島根大学の予定。

【懇親会】18:15～20:30

総会終了後、会場を市内のホテルに移し、18 時すぎから懇親会が行われた。各自の近況報告等で 2 時間があったという間に経過し、最後に、寄贈された「続・日本産蝶類文献目録」の争奪じゃんけん大会が催され、盛会のうちに懇親会は終了した。

終りに

多大な時間と労力を費やして得られたデータをわかりやすくまとめて発表していただいた発表者の方々、会場提供や当日の運営に御協力いただいた鳥取県立鳥取博物館、会場手配や当日準備に奔走いただいた地元鳥取県の会員の皆様ほか関係各位に対し心より厚くお礼申し上げる。

会員の近況報告など

1. 三段峡でクロコノマチョウを目撃

淀江 賢一郎

広島県三段峡にハイキングに出かけたおりクロコノマチョウを目撃したので報告する。

2008年11月1日（午後0時48分）、広島県安芸太田町芝木三段峡水無口、1頭目撃（写真）。この日は、六虫会が帝釈峡で行われている日だったが、前々からの都合で三段峡に。

正面入り口から2時間ほど歩いた水無口がよく陽のあたる林縁で発見したもの。新鮮な個体だったが、目撃したのは1頭のみ。このあと、二段滝、三段滝への遊歩道では発見できなかった（葎が原付近はよさそうな場所に見えたが見つからず）。



三段峡産クロコノマチョウ

(Ken-ichiro Yodoe 〒690-0862 松江市比津が丘2-1-7)

2. 奄美諸島の“蝶”撮影記

後藤 和夫

奄美諸島には過去 4 回ほど採集旅行に出かけてきたが、14 年も前に訪れたのが最後となっている。当時は 40 代後半の現職中で時間の制約があるため当然、採集を主として出かけたのだが、興味のあった生態観察や撮影に心残りを感じていた。それから公私とも忙しくなってきたことと県内の調査活動に主体を置くことになったことなどで、県外に目を向ける時間が取れなくなっていた。

会社勤めも終わり、趣味の同好会を結束して立ち上げた‘山口むしの会’も 7 年が経過し軌道に乗ってきた。その間会員さんも多彩になり更に多くの知見を積む必要も感じていたことから、2008 年はこれまで出かけた思い出の深い場所を再訪することにし、5 月の対馬遠征から始めて 6 月の奄美諸島へと続いた。これから徳之島、奄美大島、沖永良部島で見てきた蝶類を紹介してみたい。

・第一日目 2008年6月23日(月)曇り後晴れ 山口(自宅)ー福岡ー鹿児島ー徳之島へ

この撮影旅行に同伴する岩国市の稲田博夫氏と新幹線の厚狭駅で落ち合い博多へ。福岡空港発 9:30 (JAC) で鹿児島空港には 10:15 着、鹿児島発 10:55 (JAL) で徳之島空港に 11:55 に到着。昼食後、早速レンタカーを借用し天城町を南下した。14 年も前とは道路や生活環境もかなり変化し前に立ち入ったポイントが分からず、西阿木名を過ぎたあたりで探索を試みた。荒地や農耕道に入ると、早速アオタテハモドキが足下から飛び立った。それらを撮りながら進むと道の両脇にチラチラ小さなシジミチョウ。じっくり確認すると新たに分類されたヒメシルビアシジミが多く見られる。林縁を暫く観察すると滑るように飛翔するアカボシゴマダラを目撃するが、高くて手に負えない。少し場所を変えてこんもりとした樹木の立ち並ぶ半日陰の農道を進むと、モンキアゲハ、リュウキュウミスジ、イシガケチョウに混じりカラスアゲハ(奄美亜種)が時折飛び交った。特にナガサキアゲハ♀の白さは目を見張るものがあり、写真に撮れるものは全ておさめた。

アカボシゴマダラは林縁部で飛翔するのを何度と確認するが、何れも 20m を越す高さでマツの木に止まった個体(♂)を望遠レンズで狙ったが、何とか分かる程度で思うような撮影にはならなかった。そのほか蛾類の美麗種キオビエダシヤクの圧倒的な多さには唖然とするばかりだった。

続けて伊仙町に向かい故和泉重千代翁の生家に立ち寄り、あたりを散策するとルリタテハの♀に出くわしたが、その大きさは本土と比べようもないもので、ルリ状の帯(紋)も大きく見事な出現でこれは奄美諸島の特長の一つになっている。廻りにはハイビスカスの花が咲き、ナガサキアゲハやツマベニチョウが交互に吸蜜に来了。旅行には赤のネットを持参したが、南方では非常に効果的で両種とも何回となく近づいて来た。ここはアカボシゴマダラのポイントで、飛翔空間となっている樹木の間で時折飛び交い、稲田氏は初めての種だったので記録として 2 頭程捕獲することにした。

初日はアカボシの撮影は思うようにならなかったが、17 時を過ぎ宿泊地の亀津に向かった。

・第二日目 2008年6月24日(火)晴れ 徳之島一面縄ー伊仙ー徳之島空港ー奄美大島へ

宿を 8 時に出発、面縄の集落地外れの山間に入る。タイワシロクロシジミやアマミウラナシジミが林縁でチラチラ飛び交い、ナミエシロチョウ、ツマベニチョウに混じりモンキチョウがセンドングサの廻りに多く見られる。ツマベニチョウが低木林に執着するため観察すると、ギョボクが自生しており♀の産卵行動から交尾個体まで見つけ、それらを撮影したが、ウスイロコノマチョウについては思うような被写体にならなかった。10 時過ぎより昨日のポイント伊仙に向かい、アカボシゴマダラを探すことにした。程なく樹木の花(樹種不明)にアカボシが飛来することが判り、調べたところ止まっている本種の♀を発見。距離も近く写真にはもってこいで早速稲田氏を呼んで撮影に専念した。この旅行の一つの目的としていたアカボシの撮影が叶って、余裕もでてきた。それから一つの木で飛び回る♂を見つけたが、観察すると羽化して間もない♀が止まり、この♀を求めて♂が盛んに求愛行動しているところだった。これも 2m と近くカメラにおさめた。ここでリュウキュウヒメジャノメも撮影、時間と共にモンキアゲハとナガサキアゲハは交互に飛来した。

昼を回ったため空港方面に移動を開始し、天城町に新しく開通された秋利神川に掛かる秋利神橋のある自然公園に立ち寄った。ここは徳之島随一の溪谷で素晴らしい景色が広がっていた。時間があれば溪流において探索すれば面白いと思いながら暫く散策すると、何処からともなくアガボシが横切った。本種は広く生息するようである。

空港に到着レンタカー返却後、次の目的地となる奄美大島へ。徳之島空港発 15:20 (JAC)、奄美空港には 15:50 に到着した。レンタカーの手続きを済ませ、宿泊地となる奄美市名瀬方面に。途中龍郷町の赤尾木で一時間ばかりの探索を行った。

車から降りると直ぐにナミエシロチョウが飛翔したが見失った。集落地と畑地の間に立ち入ると早速ベニモンアゲハを確認、飛び回るだけで写真にならず捕獲した。この種も 14 年前には分布してなく、時の経過を知ることができた。山際を見渡すとアカボシが何個体となく飛び回っていたが、何れも高く撮影は勿論、採集すらできなかった。またツマムラサキマダラ♂を確認、近づくと驚い



秋利神橋(徳之島)

たのかフワと飛び立ち山裾に消えた。17時30分頃本日の工程を終わり、名瀬に向かった。

・第三日目 2008年6月25日(水) 晴れ 名瀬—小湊—西仲間—湯湾岳—知名瀬—名瀬へ

今日は一日奄美大島だけの探索、8時30分頃から行動を開始した。まず小湊に向かってR58号を南下したが、この国道も整備され20分弱で現地に到着した。当地はアカボシゴマダラの有名産地で、過去のポイントで探索したが、意に反し一向にそれらしい姿はなく、テングチョウやナミエシロチョウを暫く追った。それから二手に別れ集落地を外れて山裾側を調べた。リュウキュウエノキの自生する山間を見渡したところ、アカボシが時々飛び交った。稲田氏を呼んで撮影の機会を伺ったところ、食樹で早が産卵行動を始めた。距離は少しあるが、300mmでの撮影は十分可能で産卵シーンを撮ることができた。本種に関して一連の目的を達し次の探索地西仲間に転戦することにした。

住用町西仲間は国道が新しく整備されたため、それらしいポイントが判りにくくなっていた。山間に入れば何とかかなると思ひ、荒れた林道に入り探索することにした。奄美諸島は言わずと知れた本ハブの生息地であるが、過去の経験から無茶をしない限り大丈夫との思いもあり歩を進めたところ、相変わらずモンキアゲハが多く、ナガサキアゲハの白化の進んだ個体が時々ゆったりと飛び回る。その中から特別白いと思われるものをネットしたが、その大きさには圧倒される。山際にはクチナシが所々自生し、イワカワシジミの期待もあつたが確認はできなかった。その他の種として、クロセセリを発見したので撮影した。

続けて宇検村から大島で一番標高のある湯湾岳(694.4m)に移動したが、ポイントと思われる山道は薄暗くなって、期待したほどではなかったが、ルリタテハの大きな個体を捕獲することができた。時々ツマベニチョウも飛来するが、散発的で写真にするチャンスは訪れなかった。ただアオバセセリのスレた個体を確認したことから、時期と時間さえ合えばスミナガシも何とかかなる感じた。

ここから尾根を下り大和村に走らせたが、この日の最後の探索地の知名瀬には16時頃に到着。集落地を外れて山間に入ってみたが、思うような種は確認できなかった。また目撃したリュウキュウムラサキは止まることなく飛び去った。18時近くになり本日の工程を終わり宿所に向かった。

・第四日目 2008年6月26日(木) 曇り後雨後曇り 名瀬—赤尾木—奄美空港—沖永良部島へ

本日は沖永良部に渡る日、8時に宿を立ち24日に寄った赤尾木で、出発間際まで探索することにした。ベニモンアゲハが吸蜜にきたので撮影。ゲットウが自生していることからオオシロモンセセリを探したところ、時折飛び出したが素早い飛翔でどうにもならなかった。出発時間も近づき奄美空港へ。レンタカー返却後、奄美発10:35(JAC)で沖永良部空港着11:10。

早々にレンタカーを借用しコノハチョウの生息する知名町の大山に向かったが、このころから空模様がおかしくなり着いたときには土砂降りの大雨となってしまった。暫くすれば止むだろうと昇竜洞で時間を過ごしたが、止む気配はなく諦めて宿泊地となる和泊町に引き上げた。15時を過ぎた頃から雨もあがり薄日が差してきた。このままだと消化不良になるため大山に再び出かけた。

着いて程なくこの旅行で二番目に目的としていたコノハチョウ♂が飛び立ち葉先に止まった。初めて見る稲田氏はやや興奮気味にシャッターを何度となく切られたが、早々と目的が達成できたのも寸暇を惜しまず行動した成果だと二人で感じいった。雨上がりの林縁にルリタテハやイシガケチョウも姿を現し、これらを撮影してからこの日の工程を終え18時過ぎに宿所の和泊に戻った。

・第五日目 6月27日(金) 晴れ 大山—越山—沖永良部空港—鹿児島空港—福岡空港—自宅へ

最終日は余裕を持ったの行動となり、先ず大山に向かったが上越の集落地廻に咲くハイビスカスやランタナに、多くの蝶が次々と吸蜜に来るため暫く撮影することに専念した。まずナガサキアゲハを初めにモンキアゲハ、シロオビアゲハ、ベニモンアゲハ、ジャコウアゲハ、アオスジアゲハ、ツマベニチョウ、ツマグロヒョウモン、アオタテハモドキに昨今話題となっているクロマダラソテツシジミはかなり見られ、南になるほど少なくなるナミアゲハまで写し、ここで殆どクリアした。

続けて大山でコノハチョウの全ステージを観察することで、充実した一時を過ごすことができた。14時過ぎから和泊町越山に移動し最後の撮影を楽しむことにしたが、ナガサキアゲハは勿論ツمام



沖永良部島越山公園にて(左 稲田氏、右 筆者)

ラサキマダラを追ったりした。普通種となるウラナミシジミやチャバネセセリも多く、ツマベニチョウも時折飛び交い、コノハチョウは越山でも少ないが確認した。約 2 時間探索の後、記念撮影を済ませこの撮影旅行を終了し空港へ。 沖永良部発 17:20 (JAC) で鹿児島空港着 18:25。鹿児島発 19:15 (JAC) で福岡空港着 20:00。後は博多から新幹線に乗り無事帰宅した。

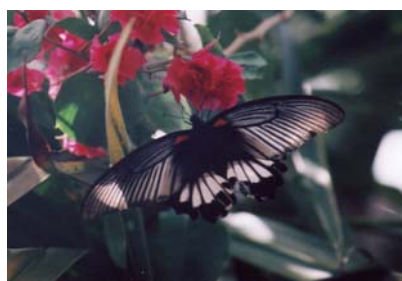
奄美諸島巡りは一回の旅で全て目的を達することを考え、4 泊 5 日としたことで島嶼に生息する蝶類もほぼ撮影と観察ができた。また梅雨の末期にもかかわらず天候にも恵まれたことも幸いした。末文になったが、この旅行に同伴し色々お世話になった稲田博夫氏に感謝する。



ツマベニチョウ♂



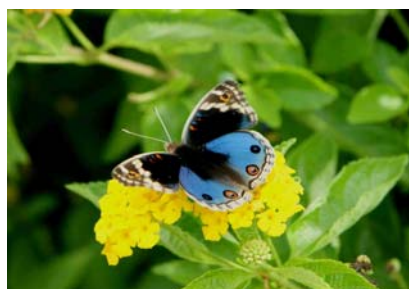
シロオビアゲハ♀



ナガサキアゲハ♀



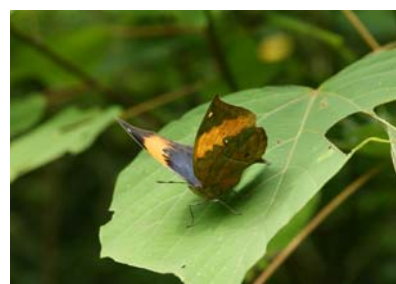
ルリタテハ♂



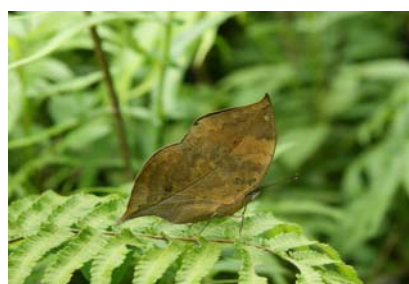
アオタテハモドキ♂



アカボシゴマダ♂♀



コノハチョウ♂



コノハチョウ♀



キオビエダシャク

(Kazuo Gotoh 〒759-0207 宇部市厚南 7 区平和町)

お知らせとお願い

事務局

1. 支部助成金

2008年度分として本部へ申請済みの支部交付金については、会計報告のとおり入金がありました。

2. 会員名簿等の取扱いと経費の節減について

個人情報について慎重に取り扱わねばならない時勢に鑑み、本誌第7号でお知らせしたとおり名簿の掲載を取りやめています。事務局においては当然ながらこれまでどおり名簿管理をしていきます。また、情報伝達の迅速化や経費節減の観点から、第9回支部例会において、「一部の連絡（例会案内等）手段をPDF形式ファイルにより電子メールで行う」ことが承認されましたので、引き続き電話番号のほかに電子メールアドレス等の情報収集を進めたいと考えております。差し支えのな

い範囲で各県幹事又は事務局へお知らせください。

連絡用書面の印刷，発送等の事務及び費用は意外とかなりの負担ですので，会員の皆様にも御理解と御協力をお願い致します。

3. 支部会報の原稿を募集しています！

2010 年 3 月に発行予定の支部会報第 11 号の原稿および表紙の写真を募集しています。
会員の皆様の近況等についてお知らせください。

4. 寄贈図書等の紹介及び支部保管リスト

これまでに寄贈を受けた又は支部で購入した図書として以下のものを保管しています。閲覧を希望される方は事務局までご連絡下さい。

No.	書籍名	発行年月	著者等	入手先	区分
1	レッドデータブックやまぐち	2002年 3月	山口県	山口むしの会	寄贈
2	山口のむし No.1	2002年 5月	山口むしの会	同左	〃
3	岡山県蝶類データ集	2002年11月	三宅誠治		購入
4	山口のむし No.2	2003年 4月	山口むしの会	同左	寄贈
5	続・日本産蝶類文献目録	2003年 6月	白水 隆		購入
6	改訂・レッドデータブックひろしま	2004年 3月	広島県	中村慎吾氏	寄贈
7	山口のむし No.3	2004年 4月	山口むしの会	同左	〃
8	恩原高原のウスイロヒョウモンモドキ	2004年11月	委員長 難波通孝	特別委員会	〃
9	山口のむし No.4	2005年 4月	山口むしの会	同左	〃
10	白水文庫その 1	2004年11月	ホシザキグリーン財団	同左	〃
11	ワンダフル・バタフライ ー不思議にみちたその世界	2005年 5月	本田計一・村上忠幸	本田計一氏	〃
12	チョウの生物学	2005年 8月	本田計一・加藤義臣 (編)	本田計一氏	〃
13	恩原高原のウスイロヒョウモンモドキ (2)	2005年11月	委員長 難波通孝	特別委員会	〃
14	岡山県恩原高原の蛾類 (2005～2007)	2008年 1月	岡山県立大学デザイン 学部生物学研究室	伊藤國彦氏	〃
15	蒜山高原の蛾類	2008年 3月	三宅誠治	同左	〃

5. 第 11 回支部例会の開催について



「やどりが 219 号 (p. 72)」でもお知らせしたとおり，下記のとおり準備を進めています。詳細は別途お知らせします。ふるってご参加下さい。
他の予定が入らないように，あらかじめお知らせしておきます。

- 日時：2009 年 11 月 21 日 (土) 13 時～
- 場所：島根県 (島根県松江市島根大学)
- 参加費：会員 500 円，非会員 1,000 円

6. 「日本鱗翅学会入会のおすすめ」について

やどりがNo.217 (p. 71) の 2008 年度第 1 回評議員会報告にもありますとおり，会員数の漸減傾向から将来の学会運営の懸念が問題提起されています。日本国全体の少子高齢化が進む中，会員の激増はもはや望むべくもありませんが，会員獲得の地道な努力は怠るべきでないと考えます。

本誌とともに会費の払込票を付けた「入会案内」を同封しますので，所属の会合や採集旅行など，機会あるごとに同好者に声をかけていただきたくよろしくお願いします。

2009 年度中国支部役員連絡先

<u>支部長</u>	後藤 和夫	〒759-0207 山口県宇部市厚南 7 区平和町 TEL : 0836-41-1164 FAX : 0836-41-1177 E-mail : kazumi-kgh46@h6.dion.ne.jp
<u>事務局幹事</u>	川元 裕	〒754-0014 山口県山口市小郡高砂町 8-32-406 TEL : 083-972-8372 E-mail : vagor@kind.ocn.ne.jp
<u>会計</u>	伊藤 靖子	〒758-0011 山口県萩市椿東 554-12 TEL/ FAX : 0838-26-7155 E-mail : RXW04042@nifty.ne.jp
<u>広島県幹事</u>	神垣 健司	〒737-0113 広島県呉市広横路 4-4-32 TEL : 0823-74-2680 E-mail : quercus77@mail.goo.ne.jp
<u>岡山県幹事</u>	吉田 嘉男	〒706-0304 岡山県玉野市番田 2810-1 TEL : 0863-66-5334 E-mail : jh4lix@po.harenet.ne.jp (ｼﾞｬｲｰｴｲﾁｰ4- <u>エル</u> -ｱｲｰｴｯｸｽ-)
<u>島根県幹事</u>	淀江 賢一郎	〒690-0862 島根県松江市比津が丘 2-1-7 TEL : 0852-26-0186 E-mail : yodoe@mable.ne.jp
<u>鳥取県幹事</u>	田村 昭夫	〒682-0881 鳥取県倉吉市宮川町 2-74 TEL : 0858-22-7707 E-mail : tanbaya@lime.ocn.ne.jp

日本鱗翅学会中国支部規約

(2001年12月2日制定)

(2005年11月26日改正)

第1章 総 則

- (名称)
第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。
- (目的)
第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。
- (事務局)
第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。
- (事業)
第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。
(1) 年1回例会(総会を含む)を開催する。
(2) 年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
(3) その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

(組織)

第5条 本支部は中国地区（広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県）に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。

(義務)

第6条 本支部の会員は住所（連絡先）、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

(種類)

第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。

- | | |
|-----------|----|
| (1) 支部長 | 1名 |
| (2) 事務局幹事 | 1名 |
| (3) 幹事 | 4名 |
| (4) 会計 | 1名 |

(選出)

第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。

幹事（事務局幹事を含む）は第5条の各県の会員の中から推薦され（1名ずつ選出。自薦を含む）、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。

事務局幹事は原則として支部長在住の県から選出された幹事がこれを務める。

会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。

(職務)

第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。

事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。

幹事（事務局幹事を含む）は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。

会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。

(任期)

第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。

事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。

幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。

会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。

第4章 例会、総会および会報

(例会の内容)

第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。

(開催地)

第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。

例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。

(例会の運営)

第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。

(総会の運営)

第14条 総会は支部会員をもって構成する。

総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。

総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(会報)

第15条 会報は例会を主催した幹事が草稿を作成、編集する。

会報は事務局が発行し、例会開催翌年の4月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

(経費)

第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに当てる。

- | | |
|-------------------|-----------|
| (1) 支部連絡費（本部より交付） | 200円/年/会員 |
| (2) 支部助成金（本部に申請） | |
| (3) 寄付金、その他 | |

(資産の管理)

第17条 本支部の資産は事務局が管理する。

(決算)

第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。

(会計年度)

第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。

第6章 補 則

(会則の変更)

第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。

(委任規定)

第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附 則

この規約は、平成14年1月1日から実施する。

附 則

この規約は、平成18年1月1日から実施する。

(支部例会について：第4回支部総会申合せ事項)

例会参加費

- 2003年から、学会員500円、非学会員1,000円とする。
- 参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。
- 総会開催中は会員外の者の傍聴は認めるが、発言権、議決権は認めない。

<編集後記>

本誌の編集を担当してからこの方、会報編集作業の効率化、文書の電子データ化などなど、会員の皆様に呼びかけしてきたことは、ほとんど何らかの形で実現して参りました。偏に皆様の御協力の賜物ですが、たった一つだけ実現していなかったのが、会員の近況報告です。正直なところ、半分諦めていたのですが、このたびについてお二方から報告をいただき、初めてコーナーの設置が叶いました。

ところで、最近、日本史ものの著作を読んで知ったのは「当たり前のことは記録されない。」ということです。自分の活動を振り返ってみると、確かに特に新しい発見でもなければ報告文として残すことはほとんどありません。

日本の室町時代の海賊・都市・性風俗・農耕といった当時の日本社会の実情は「老松堂日本行録」という李氏朝鮮の使節が記した見聞録から分かるそうです。当時日本では三毛作が行われていたことも記録されています。外国人であるからこそ、当時の日本人にとっては「当たり前のこと」を記録して残したのでしょう。おかげで現代日本人は自国のかつての姿を知ることができます。勿論記した当人には別の思惑があったはずですが、結果として我が国にとって貴重な史料となっています。

翻って現代の昆虫関係分野を見てみると、プロの研究者はともかく、同好会誌等でほぼ決まった面々しか登場しない様子からして、アマチュアの膨大であろう日々の活動結果の多くが日の目を見ないことが想像されます。そのようなほんの些細な当たり前の活動の記録を残す場として、地元の同好会誌や本誌などを活用してもらえれば、将来貴重な記録として日の目を見るかもしれません!?

さて、これを書いている約一週間前に山口県では春一番が吹き荒れました。ここ10年で最も早い観測日だそうです。本誌がお手元に届く頃には、すでに蝶屋さんはシーズンインしているのではないのでしょうか。物書きは当分休むので、自分の些細な活動の記録は来冬に持ち越します!?(Yu)

日本鱗翅学会中国支部会報 第10号

発行日：2009年（平成21年）4月4日

編集者：川元 裕

発行人：後藤 和夫

発行者：日本鱗翅学会中国支部